

〔最優秀賞受賞研究／ポスター部門〕 大学の海外フィールドワークにおける課題

遠藤, 千晶

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

164

(終了ページ / End Page)

169

(発行年 / Year)

2014-04

ポスター部門

# 大学生の海外フィールドワークにおける課題

国際文化学部 松本ゼミ  
遠藤 千晶

2013年夏、松本ゼミ有志13名は松本橋准教授とともにフィリピンで約1週間のフィールドワークを行った。目的はボホール灌漑事業に関わる3者（NIA・日本政府・農民）へのインタビュー調査である。フィールドワークの実施する上で、わたしたちが事前に想像していたことと現実との違いや困難であった点を整理しながら、大学生がフィールドワークを行う際の方法論を再考したい。



発表メンバー  
松本ゼミ：遠藤千晶  
今津健太、馬場咲歩  
高橋ゆりか、春名林

ボホール島  
(Bohol Island)  
フィリピン中部ヴィサヤ諸島の島であり、国内10番目の大きさを持つ。人口は約114万人、面積は4,117平方キロメートル。州都タグビララン。



8月7日	東京	・東京発マニラ着
8月8日	マニラ ↓ ボホール	・飛行機でボホール島へ ・現地 NGO に関する説明/意見交換 ・大学生との交流（フィリピンの大学生・若者の抱える問題等） ・マリナオダム見学（フェーズ1） ・NIA 現地事務所訪問 ・農民組織リーダー・NGO とのミーティング（リーダーによる農民組織の説明等）
8月9日		・各村でのインタビュー調査
8月10日		・各村でのインタビュー調査 ・パヤスダム、バヨガンダム見学（フェーズ2） ・ウバイ町ロスオン村訪問/専任住民への聞き取り
8月11日	マニラ ↓	・観光（チョコレート・ヒル、ターシャヤ、パンラオ島ビーチ） ・飛行機でマニラへ
8月12日		・アジア開発銀行（ADB）表敬訪問 ・日本大使館で外務省・JICA との会合
8月13日		・ストリート・テルドレン地域訪問/意見交換 ・都市貧困層地域訪問/意見交換 ・マニラ市トンド地区のスモーキー・マウンテン付近の見学
8月14日	東京	・マニラ発東京着



# 1. フィールドワーク前後の課題の変化

フィールドワーク前は英語力、健康管理や治安に問題がなければフィールドワークがうまくいくと思っていた。しかし、実際に経験してみるとそれらの問題よりも重要な課題があることを知った。そこで、問題があったインタビューを分析してみると、事前に想定していなかった3つの要素に気が付いた。それは、余裕のあるスケジューリング、周辺地域の把握、通訳者とのコミュニケーションをとることによる理解であった。

## フィールドワーク前



- ・ 英語力
- ・ 健康管理
- ・ 治安

## フィールドワーク後



- ・ スケジュール
- ・ 周辺地域の把握
- ・ 通訳者とのコミュニケーション



## 1-1. 午前3時集合!?

既存文献で、フィールドワークでは余裕のあるスケジュールを立てる必要があると言われている。たとえば、

- ・ 特定の予定を入れない予備日を設ける
- ・ 1日の調査は日の沈む前に切り上げる

ことなどが挙げられる。なぜなら、これらの対策によって予期しない事態に対処することや、また、調査結果をその日のうちにデータ化することができるからである。



### フィールドワーク前

スケジュールを立てる段階で、私たちは以下の2点を優先した。

- ①コストを下げること
- ②調査とは別に、興味・関心のある場所を訪問すること

そして、現地コンサルタントや引率の指導教員と相談し、学生の希望に沿ったスケジュールが組まれた。

→割安な早朝発の便を選んだ

→現地の小学校、アジア開発銀行(ADB)、都市貧困層やストリートチルドレンの暮らす地域を訪問予定地にその結果、理想とされている余裕のあるスケジュールとはかけ離れたものだった。

### フィールドワーク中

活動していく中で、スケジュールを詰め込みすぎたと感じたことがあった。それは、眠気と疲労によりインタビューに集中できなかった時である。これら原因は、

- ・ 慣れない環境であったために予想以上に疲れがたまっていたこと
- ・ 朝早かったこと
- ・ インタビュー時間が夜遅くであったこと

であると考えた。

しかし、スケジュールに組んだ全ての場所を訪れたかったため、スケジュールの変更はしなかった。



### フィールドワーク後

フィールドワークにおいて余裕のあるスケジュールをたてることの重要性を痛感した。

日本へ帰国後、インタビューの内容を議事録としてまとめた。その過程で、参加メンバー間で内容確認をおこなったところ、同じインタビューにもかかわらず個人々で解釈が異なっていた点をいくつか発見した。また、その情報共有の中で新たに疑問が出てくることもあった。もし、余裕のあるスケジュールを立てていたら、インタビューごとに内容確認を記憶の新しいうちに行うことができ、その場で疑問を解消することが可能だったのではないかと。

#### とある1日のスケジュール

予定	内容	詳細
3:00	3:00	ホテルビエー集合、マニラからボホール島へ移動するため空港へ
5:30	5:30	マニラ出発
6:45	6:30	ボホール州都タグビララン市街 NGOオフィスへ(休憩、軽食等)
9:00	9:20	オリエンテーション(ボホールでの旅程、注意事項等) NGOによる説明・意見交換
	11:15	大学生との交流(フィリピン大学生・若者の抱える問題等)
11:00		昼食
12:00		タグビララン市からピラー町へ移動
13:30		ピラー町産
	14:00	マニラオダム見学
14:00	15:45	NIA現地事務所訪問(NIAスタッフによる事業・状況説明/意見交換)
16:00	16:50	ダゴネイ町カルワサン村へ移動(途中、主水路等見学)
17:30	17:45	カルワサン村産、夕食
	20:00	農民組織リーダー・NGOとのミーティング
	夜 22:30	ホームステイ

## 1 - 2. ○▲※村ってどこ？

既存文献では、フィールドワークを行う際には調査対象地だけではなく、その周辺の地域を理解することも必要だといわれている。



### フィールドワーク前

以下の2つの点から、地理的な知識の必要性を感じていなかった。

- ① 常に現地 NGO スタッフが一緒に行動しているため案内してもらえる
- ② 村単位での聞き取り調査ということで、徒歩10分程度の距離を想像



○調査対象地がボホール島のどこに位置するかを確認      ○…やった  
 ×調査対象地の規模の把握や、その周辺地域の情報収集      ×…やっていない

### フィールドワーク中

困ったこと 聞きなれない村の名前が頻繁にインタビュー中に出てきた	困らなかったこと 移動の際、道に迷うなどの事故は起こらなかった
-------------------------------------	------------------------------------



### フィールドワーク後（考察）

調査地だけでなく、周辺地域の把握が必要である。

なぜなら…

- ① 調査対象地域の抱えている問題は、その地域だけではなく、周辺地域とも深く関わっている
- ② 灌漑事業の調査では、ダムから調査対象地域の村まで、水路からインフォーマントである農民の家までの距離を把握すべき
- ③ 質問をする際にも、全体像をイメージしながらよりの確な質問ができる

## 1 - 3. 話、噛み合っていない!?

既存文献では、調査を円滑に進めるうえで通訳者を介する場合には、フィールドワーカー・通訳者間のコミュニケーションは重要だといわれている。

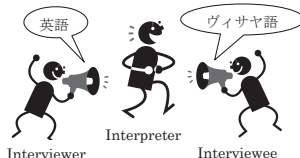


### フィールドワーク前

調査地域であるボホール島のインタビューでは

- ・現地語であるヴィサヤ語から英語の通訳を介すること
- ・通訳者は現地 NGO スタッフや大学生であること

を事前に行った。そのため、英語で聞き取りや話ができるかなど自分たちの英語力に不安を抱いていた。



### フィールドワーク中

私たちが英会話をする際に使う単語と通訳者が使う単語が違った。そのため、インタビュー中に通訳者を介して、質問とずれた内容の回答が返ってくるなど、お互いの話が噛み合わないことがあった。これを改善するために以下の2点を意識して話すようにした。

- ・使っている言葉を他の言葉に言い換えてみる
- ・質問をしたい意図をわかりやすく話すこと

また、インタビュー外では

- ・話し合いを重ね、問題意識を統一した
- ・行動を共にし、信頼関係を構築した



### フィールドワーク後（考察）

英語力だけではなく、相互理解を深めながら進めていくことが重要だ

私たちはこの問題をフィールドワーク中に克服することができた。なぜなら…

- ①通訳者との意思疎通をはかったから
- ②フィールドワークを通して通訳者が変わらず、軌道修正が可能だったから

## 2. 大学生がフィールドワークを行う際の3つの制約

スケジュール・周辺地域の把握・通訳者とのコミュニケーションなどの問題から、私たちは大学生がフィールドワークを行う際には3つの制約があると考えた。今回、私たちのフィールドワークのスケジュールは、低コストに抑えることに留意しつつ、1週間という短い期間に調査・研究と見学の両方を盛り込んでいた。

①時間：大学生であるために限られている

②資金：低コストにおさえたい

期間を延ばすことはできない



研究

ジレンマ

見学



③興味・関心：なるべく多くの場所を訪れたい

見学地を減らしたくない

## 3. 大学生版フィールドワーク論を！

3つの制約の中で起こりうる問題を解決するには時間や資金を増やすか、学生の興味・関心に基づく見学を減らすしかない。大学生のこうしたジレンマに対して、既存のフィールドワークに関する文献では明確な答えは示されていない。ではどうすればいいのだろうか。答えを出せるのは大学生自身である。法政大学では様々な学部で海外フィールドワークが実施されていると聞く。皆、私たちと同じようなジレンマに陥っているはずである。そうした経験を互いに学び合い蓄積することで、「大学生にとってのフィールドワーク論」を作り上げる必要があるだろう。今後の課題としては、いかに経験を共有し合うことが出来るかという点にあるといえる。たくさんの仲間と多種多様なフィールドワークの経験を大いに共有していきたい。